

本格実施から丸4年が経った「総合的な探究の時間」。
現場で試行錯誤が続くなか、
実践のヒントとなる探究の事例をご紹介します。

● 年間スケジュール（普通科）

1年

探究の訓練期間と位置付け、
地域課題探究に取り組む

1年次は、探究の訓練期間。前期は、講演会や哲学対話を通してNeed・Will・Canを意識する。後期は、「地域」「教育」「医療」「震災・災害」の4分野に分かれ、個人もしくはグループで地域課題探究に取り組む。

2年

ゼミに分かれて活動し、
興味・関心事を突き詰める

2年次は、探究の本番。分野ごとに16のゼミに分かれ、自分の興味・関心事を突き詰める。探究計画書を軸に、ゼミの担当教員との面談などを通してテーマや問いを深め、調査・分析・考察した内容をまとめて発表する。

3年

探究での経験を軸に論文に
あたり、進路につなげる

探究で学んだ経験を活かし、自らの探究テーマに関連する論文や進学希望先の先生の論文などを読み、その内容をまとめ、発表する。その後は、関連する社会問題について研究を重ねる。

School Data

1922年創立／普通科・理数科／生徒数575人（男子325人、女子250人）／進路状況（2026年3月卒業）
大学197人、短大3人、専門学校6人、就職2人、そのほか11人

白河高校（福島・県立）

出発点は興味・関心。
生徒の自走を促して
楽しく充実した活動に

生徒・教員の双方にとって
楽しく充実した探究を目指す

福島県立白河高校では、「主体性と探究心を養う」ことを総合的な探究の時間の目標に掲げてきた。探究の立ち上げから携わった渡邊先生は、次のように振り返る。

「当時はスクール・ポリシーなどもまだなく、3年間を通してどのような資質・能力を育てるか、という目標設定から始めました。そして、課題発見・解決力、情報収集・分析力、まとめ・表現力を身につけ、大学入学以降の学びを継続する礎になるような活動にしよう」と、探究の3年間のカリキュラムを設定しました」

加えて、当初から意識してきたのが、持続可能な仕組みづくりだ。探究の推進を担当する分掌（総探サポートメンバー）を設け、メンバーが中心となって進めることに加え、全教員が何らかのかたちで探究に携わり、負担を分散する体制ができていた。探究の主任である星先生は、「教員の数が限られるなか、みんなで分担して負担が偏らないよう配慮し、生徒にとっても教員にとって実行可能で楽しく充実した活動になることを目指してきた」と話す。

「実行可能で楽しく充実した活動」にするために大事にしてきたのが、生徒の興味・関心を探究の出発点とすることだ。自分が見たいことや好きなことであれば、



前列左から、教頭・荒井大樹先生、大槻涼太先生、後列左から、大鹿啓子先生、星 真木子先生、渡邊裕子先生。

1年次は探究の訓練期間。
地域課題探究で経験を積む

普通科の総合的な探究の時間は、各学年週1時間ずつで、全学年とも木曜日の6時間目に開講。1年次を「探究の訓練期間」、2年次を「探究の本番」と位置付け、3年次はそれを各自の進路につなげるカリキュラムとなっている。

1年次の授業はクラスごとに実施し、探究の手法を学びつつ、地域課題探究に取り組む。前期には、地域で活動する人の講演会や生徒同士の哲学対話に多くの時間を割く。その意図について大槻先生は、「自分の好きなことと地域を掛け合わせるとはどういうことか、地域にはどういう課題やニーズがあるか、自分はどういうことに関心があるか、自分はどういう価値観を持っているか……といったことを考え、Need・Will・Canを意識するきっかけにしてほしい」と話す。

後期には、それぞれの興味・関心から地域、教育、医療、震災・災害の4分野に分

生徒は主体的・意欲的に取り組めるだろう。生徒が自走すれば、指導にあたる教員の負担も減るだろう、というわけだ。一方、多くの学校と同様、白河高校でも「自分が何に興味・関心があるかわからない、やりたいことがないという生徒が少なくない」と、同じく1年生の探究を主導する大槻先生は言う。そうした生徒の実情に合わせ、3年間の探究活動を通して自分の興味・関心事を見つけ、進路につなげる……という流れをつくるべく、総探サポートメンバーを中心に試行錯誤を重ねてきた。

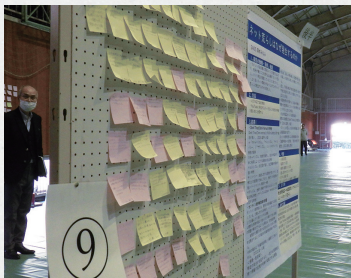
生徒の探究テーマの例

【普通科2年生】

- 不登校の生徒にとって
安心できる学校・授業とは
- 紫式部VS清少納言
～平安最強女流作家はどちらか？～
- 受け身の娯楽の影響とは
- 裁判員制度を身近なものにするためには
- 災害の記憶伝承のために
私たちができること
- 技術発展と環境保全を両立するには
- 月の水資源は宇宙移住に利用できるか

【理数科「理数探究」】

- 第一次アニメ大戦～空想科学のロマン～
- みんなを笑顔に白い粉プロジェクト
(チョークの再生)
- エチレンを使って
花咲かいいいさんになりたい!
- 究極の泥団子をつくろう～童心回帰～



(左上)1年次前期の講演会の様子。福島大学の前川直哉准教授が、「いま、福島で学ぶということ」をテーマに講演し、ワークショップを行った。(右上・左下・右下)学年末のポスターセッションの様子。各クラス・ゼミの代表24組が各6分で発表。生徒たちは自分が関心のある発表を聞き、付箋に感想を書いて共有する。

社会的・学問的意義まで 考えた、調べ学習のその先へ

「探究の本番」である2年次は、クラスの枠は取り払い、情報、教育、文学など分野ごとに16のゼミに分かれて、自分の興味・関心のあるテーマを突き詰める。各ゼミは、分野と専門に近い教員が担当。管理職も含めて分

かれ、個人もしくはグループでテーマを決めて調べ、その内容をまとめて発表する。「地域のことを知ってほしい」という思いと、縛りがあるほうがテーマが設定しやすいという観点から、地域という枠を設定しています。地域の方々も協力的で、市役所や地域の事業者などに話を聞きに行く積極的な生徒もいます。一方、テーマ設定に時間がかかる、机上の調べ学習で終わってしまう...といった課題もあります」(大槻先生)

一昨年度からは、学年の最後、1・2年生合同のポスターセッションを実施。1年生は、各クラスから選ばれた生徒が発表する。大学の教員や市の担当者など外部講師も招き、昨年度は同じ校舎を使用している定時制の白河第三高校の生徒も参加した。

「ほかの生徒や先輩の発表を見ることは、生徒にとって刺激になり、2年次の探究テーマのヒントにもなっています。普段の授業ではなかなか見られないイキイキと発表する生徒の姿は、教員の探究に対する意識が変わるきっかけにもなっていると感じます。好きなもの、ことならこんなに雄弁に語れるんだ、こんなすごい発表ができるんだと、私自身もポスターセッションでは大いに感銘を受けています」(大槻先生)

担し、それぞれが十数人の生徒の探究に伴走する。生徒は「探究計画書」を作成・提出し、ゼミの担当教員との面談などを通して、問いや情報収集の方法を具体化していく。「最初はざっくりしていたり検証不可能なテーマだったりするケースもあるが、対話をしながら深めている」と渡邊先生。年間計画やテキストは共通だが、具体的な進め方は各教員に委ねられており、それぞれが工夫しながらゼミ活動を行っている。

指導における最大の課題は、調べ学習で終わらせず、いかに探究的な学びにするか。自らもゼミを担当する教頭の荒井大樹先生は、「調べて終わりではなく、その先の社会的意義まで考えられるようになってほしい。生徒たちには、自分が調べたことを考えてみよう」と問いかけている。また、「学問的意義も大事」と渡邊先生。オープンデータを使う、先行研究にあたるといった指導をしているが、「集めた情報を分析・考察する、論理的な流れをつくる」という部分がまだ弱い」と指摘する。

2年次の探究の集大成として、各自がスライドを作成して発表。さらに、ゼミごとに選出された代表が、先述のポスターセッションでプレゼンテーションを行う。続く3年次には、自らの探究テーマに関連する論文や、希望する進路先の先生の論文などを読んで、その内容をまとめ、発表する。「探究の経験を活かし、難しい内容でもしっかりと読み込んで発表する姿は、頼もしい」と大槻先生。進路への接続について、「モヤモヤと悩みながら探究を進める過程で、

少しずつだが身につく課題を発見し、解決に導く力を入試に活かすとともに、自分の興味・関心が見えてくるので、進路決定にも活かせる」と渡邊先生も重ねる。

指標となるルーブリックを作成。 理数科との学び合いも視野に

今年度は新たな取組として、指導評価の観点となるルーブリックを作成した。「過去にルーブリックを作成・活用した際に、生徒の探究がぐんと深まったという実感があり、改めて作成した。生徒に自己評価をさせたあと、教員が評価し、面談に活用する予定だ」と渡邊先生。荒井先生も「教員も生徒も、ルーブリックがあることで目標をもって進んでいけるのではないかと」期待を寄せる。

白河高校には普通科に加えて理数科があり、2・3年次には理数探究に取り組んでいる。物理・化学・生物・地学・数学の5つのゼミに分かれ、それぞれの専門の教員がゼミを担当。「仮説→実験・観察→分析→発表」という一連のプロセスを経験する。理数探究でも生徒の興味・関心を出発点にするというコンセプトは変わらず、「素朴な疑問から身近なテーマと理数分野を結びつける生徒が多い」と理数科主任の大鹿先生。2年間をかけてグループ探究に取り組み、3年次の12月に発表会を行っている。「この数年で普通科の探究が盛り上がりつつあるので、今後は理数科と普通科の合同発表会などもやってみたい」と大鹿先生。「お互いにとって良い刺激や学びの機会になるのでは」と今後への期待で締め括った。

まとめ

白河高校の探究のモットー

生徒にとっても教員にとっても
楽しく充実した活動にする

#興味・関心 #地域課題探究 #脱・調べ学習 #ゼミ形式

興味・関心を出発点に することで自走を促す

教員との面談などを通し、テーマや問いを深めていく。1年次は「地域」という枠を設けることで、テーマを絞りやすくする。2年次は自分の好きなことや興味・関心事からテーマや問いを設定することで、自走を促す。

机上で調べるだけでなく、 元データにあたり情報を集める

インターネットなどで闇雲に調べるのではなく、学術的な論文や先行研究のレビュー、オープンデータなどにあたること、また、テーマによってはインタビューやアンケートなどの調査を行うことを推奨。

課題の 設定

情報の 収集

整理・ 分析

まとめ・ 表現

成果はスライドにまとめ、 ポスターセッションで共有

探究で取り組んだ内容をスライドにまとめて発表する。学年末には1・2年生合同のポスターセッションを実施。1年生はクラス、2年生はゼミで選ばれた生徒が、ポスターを作成してプレゼンテーションを行う。

調べたことから何がわかるか、 論理的に分析・考察する

集めた情報を整理・分析し、そこからどのようなことがわかるかを論理的に考察する。情報は集められるが分析・考察力が弱い生徒が多く、2年次にはゼミの担当教員との対話を通して深めていく。

探究設計のPOINT

- POINT ① 興味・関心を最優先し、
生徒の自走を促す
- POINT ② 全教員が探究に携わり、
負担の偏りを抑える
- POINT ③ 自分のことや地域の課題に
気づく機会を提供する

評価基準

ルーブリックは、「課題設定力・課題解決力(興味・関心に基づいて課題を設定できる／解決のための仮説を立て、根拠を集めてそれを実証することができる)」「情報収集力・調査分析力(情報の信頼性・分析力)」「まとめ・表現力(論理性／発表資料／プレゼンテーション)」「協調性」について、レベル1～4の4段階で設定している。

評価項目	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
課題設定力・課題解決力	興味・関心に基づいて課題を設定できる。	興味・関心に基づいて課題を設定でき、仮説を立て、根拠を集めてそれを実証することができる。	興味・関心に基づいて課題を設定でき、仮説を立て、根拠を集めてそれを実証でき、課題の解決に貢献できる。	興味・関心に基づいて課題を設定でき、仮説を立て、根拠を集めてそれを実証でき、課題の解決に貢献でき、課題の解決に貢献できる。
情報収集力・調査分析力	情報の信頼性を確認できる。	情報の信頼性を確認でき、情報の分析力がある。	情報の信頼性を確認でき、情報の分析力があり、課題の解決に貢献できる。	情報の信頼性を確認でき、情報の分析力があり、課題の解決に貢献でき、課題の解決に貢献できる。
まとめ・表現力	課題のまとめが簡潔である。	課題のまとめが簡潔で、論理性がある。	課題のまとめが簡潔で、論理性があり、発表資料が整っている。	課題のまとめが簡潔で、論理性があり、発表資料が整っており、プレゼンテーションが上手である。
協調性	課題の解決に貢献できる。	課題の解決に貢献でき、課題の解決に貢献できる。	課題の解決に貢献でき、課題の解決に貢献でき、課題の解決に貢献できる。	課題の解決に貢献でき、課題の解決に貢献でき、課題の解決に貢献でき、課題の解決に貢献できる。